

『正直爲心 神明所祐 禍福無門 唯人所召』は北倉の第三扇と全く同じければ、同様の屏風二疊ありたるものと見ゆ。

(124) 藺

箱 一合

(南第七二號)

(125) 杖

五枚

(南第六五號)

瑇瑁杖 一枚

丁字形八角造、牙の莊、籐及び樺にて纏けり、長四尺

五寸四分。瑇瑁、籐及び樺の剝落せるを修補せり。

同 一枚

丁字形竹形、紺牙撥鏤、長四尺七分。第二節枝闕け

たるを今補へり。

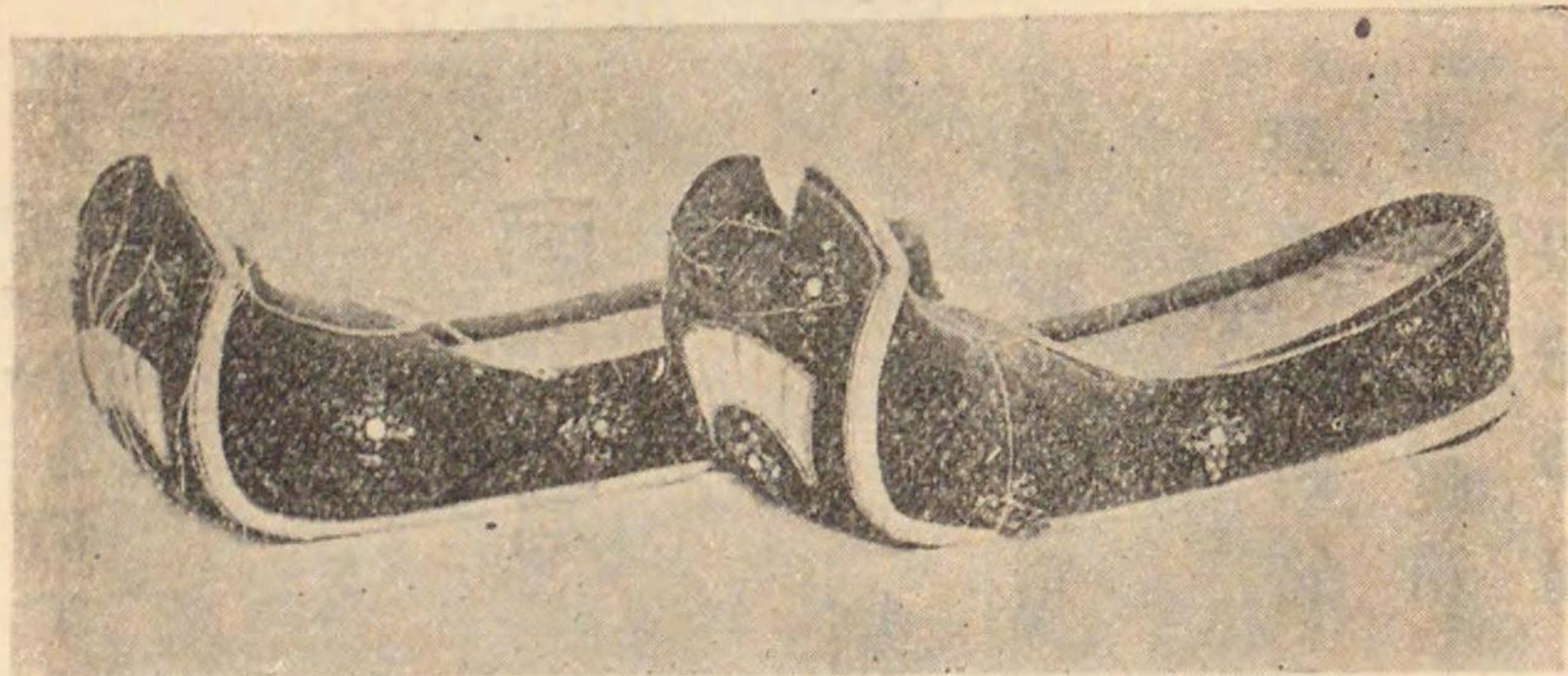
假斑竹杖 一枚

頭と尾とは水精の莊、籐及び樺を纏ふ、長五尺三寸

九分。尾の水精破損せるを今修造せり。

椿 杖 二枚

各長五尺三寸三分、金銀の彩色あり。



納御禮履

(126) 納御禮履 一兩

(南第六六號)

古昔宮中に於て正月初卯の日御杖を進むる儀あり、いはゆる卯杖これなり、右椿の杖は蓋此の儀に用ひられたるものなるべし。

御禮服の上に納の御袈裟を召されたる場合に用ひらるゝ御履なり。緋皮造、銀の花形、珠玉の莊、黄金の押縫、平城宮御宇後太上天皇(聖武)の御召用なり。赤漆の履箱を具す、題箋に『第五櫃』とあり。蓋佚せるを今補へり。

(127) 赤漆觀木胡床 一脚

(南第六七號)

籐の坐、金銅の帖角。殘材を集めて補作せり。後

世の御椅子と稱するものなり。

一七八

南倉階と南棚

(128) 鏡

箱 五合

(南第七一號)

銀平脱八角鏡箱

一合

金銀の鑲子を着く。銀帖角の剝落せるもの一包を附す。

銀平脱鏡箱

一合

外側圓形、内側八角。

漆皮八角鏡箱

二合

一合に金銀花鳥の繪あり。

金銀繪鏡箱

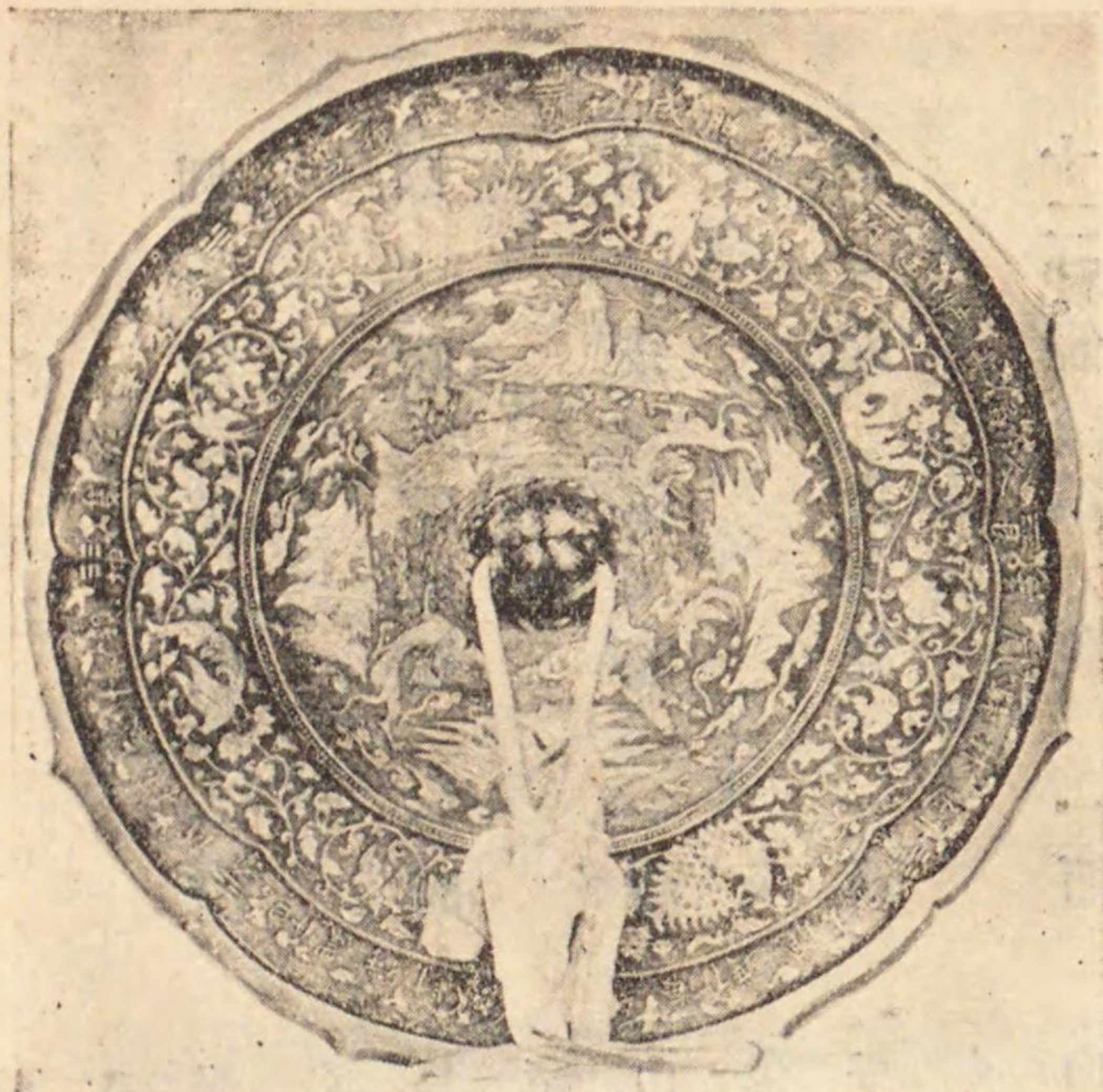
一合

蓋と身と合はず。

(129) 赤漆八角床

一枚

(南第六八號)



八角鏡第一號

(130) 鏡

三十八面

(南第八〇號)

八角鏡 第一號 一面

金銀山水八卦の背、徑一尺六分、新造の帛帶を着く、背に詩あり、云はく『隻影嗟爲客、孤鳴復幾春、初成照瞻鏡、遙憶畫眉人、舞鳳歸林近、

南倉階上

一七九

盤龍渡海新、緘封待選日、披拂鑿情親。

八角高麗錦の箱一合を具す。

平螺鈿の背、徑一尺三寸二分、緋繩の新帶を着く。

圓鏡 第二號 一面

鳥獸花の背、徑九寸九分、緋繩の新帶を着く、殘緒僅に存す。漆皮箱一合を具す。

圓鏡 第三號 一面

山水鳥獸の背、徑一尺三分、緋繩の新帶を着く。

圓鏡 第四號 一面

金繪漆箱一合を具す、緋綾の覗あり。

圓鏡 第五號 一面

平螺鈿の背、徑一尺三寸二分、緋繩の新帶を着く。銀平脫の箱一合を具す。

十二稜鏡 第六號 一面

白銀。黄金瑠璃鈿の背、徑六寸三分、新造の帛帶を着く。漆皮箱一合を具す、白繩の覗あり。瑠璃鈿は、今云ふ七寶流しなり。

圓鏡 第七號 一面

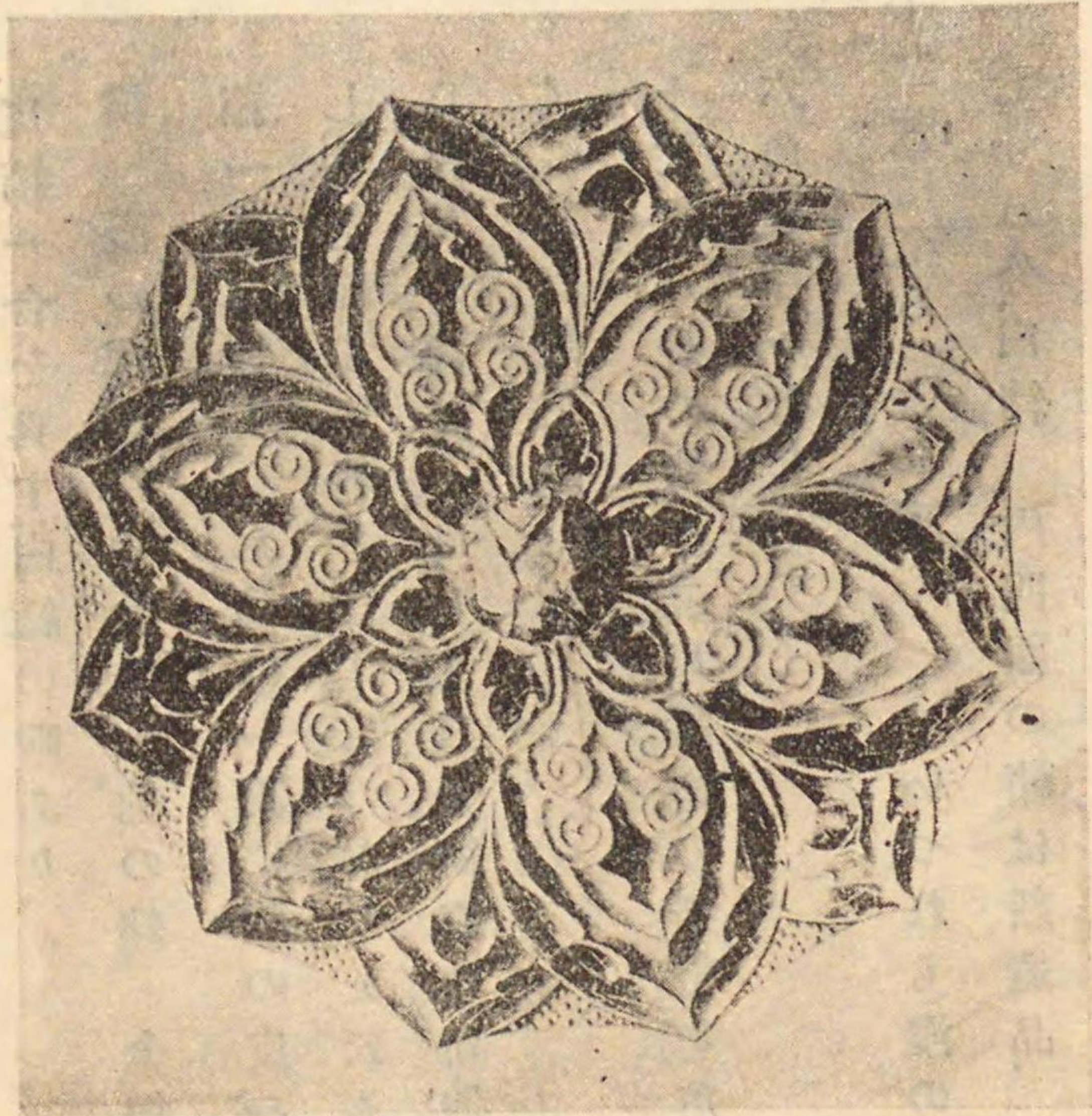
鳥獸花の背、徑八寸三分、新造の緒を着く。漆皮箱一合を具す、緋綾の覗あり。

圓鏡 第八號 一面

鳥獸花の背、徑八寸、新造の帛帶を着く。漆皮箱一合を具す、緋繩の覗あり。

圓鏡 第九號 一面

鳥獸花の背、徑一尺、新造の緒を着く。



十二稜鏡

方鏡 第十號 一面

鳥獸花の背、徑五寸八分新造の緒を着く。漆皮箱一合を具す、白繩の覗あり。

圓鏡 第十一號 一面

錢。漫の背、徑八寸七分、木綿の緒。金銀繪漆箱一合を具す。木綿は一説に穀の皮を漂泊し、布を織る原料となすものなりと云ふ。

八角鏡 第十二號 一面

鳥獸花の背、徑一尺七寸三分、緋繩の新帶を着く。箱は新造品。

圓鏡 第十三號 一面

十二支八卦の背、徑二尺、緋繩の新帶を着く。六角櫃箱一合を具す。

圓鏡 第十四號より第二十二號に至る

九面 どれも漫の背、徑七寸八分、白緒。内四面の緒は新造品。

圓鏡 第二十三號より第三十號に至る

八面 どれも漫の背、徑

四寸九分、木綿の緒

圓鏡 第三十一號 一面

文字の背、徑五寸七分、文に云はく『勿相思勿相忘常貴□樂未央』

圓鏡 第三十二號 一面

鳥獸花の背、徑三寸五分。花鳥の背、徑四寸九分。

八角鏡 第三十三號 一面

花鳥の背、徑四寸九分。いづれも花虫の背、徑三寸八分。

八角鏡 第三十四號 第三十五號 二面

背及び徑とも前號に同じ、明治卅五年新嘗祭の日、杉本神社の床下に於て發見せしものを茲に納む。箱は新造品。

六角鏡 第三十七號 一面

花の背、徑三寸八分。花虫の背、徑二寸三分。

八角鏡 第三十八號 一面

南倉階与棚外

(131) 篋

篋

二張

(南第七三號)

和名百濟琴なり、今存するものはその残材のみ、収集して箱に納む。傍に摹造二張を附す。

(132) 古

裂類

重箱八臺

(南衣帶幘帳等ノ内)

整理を了して重箱に納めたるもの、一部をこゝに出す。重箱の目左の如し。

天號

地號

玄號

黄號

宇號

洪號

荒號

參照年表

紀元	御宇	年號	事	西洋年
一三三三	天武		天皇在位	六七三
一三四六	文武			六八六
一三六七	文武	慶雲四	七月二十六日詩序日付	七〇七
一三七〇	元明	和銅三	都を平城に遷す	七一〇
一三七二	元明	同五	(唐玄宗位に即く)	七一二
一三八〇	聖武	神龜元	天皇即位	七二四
一三八九	聖武	天平元	神龜六年八月五日改元、光明子を立て、皇后とす	七二九
一三九一	聖武	同三	九月八日雜色御日付	七三一
一四〇一	聖武	同三	詔して諸國に國分寺を建てしむ	七四一
一四〇四	聖武	同六	十月三日樂毅論御日付	七四四

年表

一四〇九	聖武	天平元	四月改元	七四九
一四一二	孝謙	勝寶元	七月天皇即位、改元	七五二
一四一六	孝謙	同	四月九日大佛開眼	七五六
一四一七	孝謙	同	五月三日太上天皇(聖武)崩す 六月二十一日國家珍寶及種々藥を東大寺に獻す 七月二十六日屏風花籠等を東大寺に獻す (去年唐安祿山反し、此の年玄宗獨に奔る)	七五七
一四一八	淳仁	天平寶字二	正月二十一日沙金請文日付、八月改元	七五八
一四一九	淳仁	同	六月一日大小王眞蹟を東大寺に獻す	七五九
一四二〇	淳仁	同	三月十九日桂心請文日付	七六〇
一四二四	淳仁	同	皇太后(光明)崩す	七六四
一四二七	淳仁	同	五月惠美押勝亂を爲す、九月十一日御甲御大刀御弓出藏	七六七
一四四一	淳仁	天應元	八月神護景雲を改元 王羲之書法出藏後還納	七八一

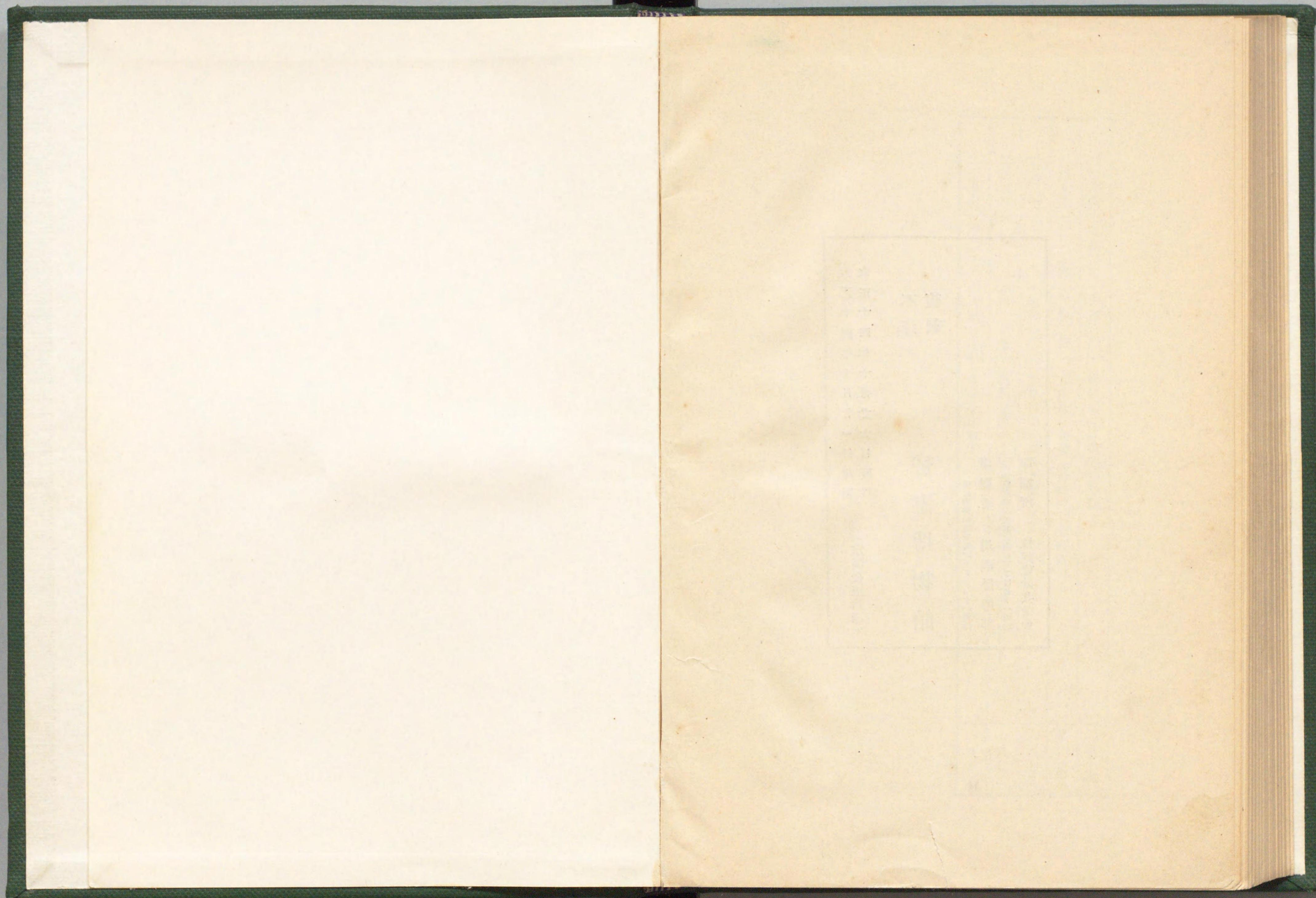
一四四七	桓武	延暦六	六月二十六日曝涼使解日付	七八七
一四五三	桓武	同	六月十一日曝涼使解日付	七九三
一四五四	桓武	同	都を平安に遷す	七九四
一四七一	嵯峨	弘仁二	九月二十五日勘物使解日付	八一
一四八三	嵯峨	同	弘仁年間屢寶物の出藏、還納、換納あり	八二三
一四八六	淳和	天長三	九月一日雜物出入帳日付	八二六
一五一六	文德	齊衡三	六月二十五日雜財物實錄日付	八五六
一八四〇	高倉	治承四	大佛炎上	一一八〇
一八四五	後鳥羽	文治元	八月二十八日大佛開眼	一一八五
一八九〇	後堀河	寛喜二	十月二十七日盗人寶庫に入り御鏡を竊む	一二三〇
一九一四	後深草	建長六	六月十七日雷寶庫に震す	一二五四
二一二五	後土御門	寛正六	足利義政に黄熟香を賜ふ	一四六五
二二二七	正親町	永祿一〇	松永久秀大佛殿を焼く	一五六七

二二三四	正親町	天正二	織田信長に黄熟香を賜ふ	一五七四
二四九三	仁孝	天保四	寶庫及び寶物を修理す、翌年に亘る	一八三三
二五三七	明治	明治一〇	奈良行幸黄熟香を截らしめらる	一八七七
二五五二	明治	同二五	御物整理掛を置き寶物を修理す、後數年に亘る	一八九二
二五七三	今上	大正二	寶庫を修理す	一九一三

一八〇〇	天正二	織田信長に黄熟香を賜ふ	一五七四
一八〇一	天保四	寶庫及び寶物を修理す、翌年に亘る	一八三三
一八〇二	明治一〇	奈良行幸黄熟香を截らしめらる	一八七七
一八〇三	明治二五	御物整理掛を置き寶物を修理す、後數年に亘る	一八九二
一八〇四	大正二	寶庫を修理す	一九一三

大正十四年十月廿一日印刷  
 大正十四年十月廿六日發行  
 (定價金五拾錢)  
 不許複製  
 帝室博物館

東京市神田區三崎町三丁目七十一番地  
 印刷者 川西房治郎  
 東京市神田區三崎町三丁目七十一番地  
 印刷所 株式會社共榮舎







2

22